

ヤングケアラー支援研究事業
第2回事例検討会 議事メモ

日 時 2022年4月25日 13時30分～15時50分

参加者 助言者：齊藤真緒氏（立命館大学）、中村健治氏（北海道社協）
児童家庭支援センター

栃木県	ちゅうりっぷ	片桐、定方
横浜市	みなと	福永、岩崎、山本
福井県	めぐみ	川田
	あわら	山本
	一陽	亀間、吉村、野尻、深尾
福岡県	SOS 子どもの村	松崎、西原
大分県	光の園	蜂須、葛城
	和	山本
	ゆずりは	井手
全国児童家庭支援センター協議会		橋本

(1) 事例検討会への新たな（随時の）参加者について

本日、福井新聞の宮崎記者がオブザーバーとして参加している。

また今後、横浜市の行政担当者がオブザーバーとして適宜参加してくる予定。

当事者参加については、①検討会での討議内容によって当事者が動揺をきたすことも想定される。とりわけ児家センの相談支援業務で出会った当事者が検討会に参加するにあたっては「痛みの再現」を強いられるかもしれない点に留意すべき。それゆえ現在、精神的に安定した状態にあり、なおかつ支援者が変容に対し常にケアできる環境にある当事者（OBを含む）を選考していきたい。また②当事者の選考については、当事者が理不尽な攻撃に曝されたり、不愉快な思いをしたりしないよう、人選過程において丁寧な確認を行い当事者の擁護に努める。当事者の言動にスポットライトが当たりはじめたことで、当事者選定の適格性や合理性、選考過程の透明性や民主性が問われる局面に来ている。当事者が不愉快な思いをしない、傷つけられない、消費されない、いわば「当事者を守る」という意味で、検討会への参加にあたっては十分な議論や説明、合意が必要。そこで③元ヤングケアラーで現在は支援者となっているような青年を人選し、当事者の意見を反映していくべき。まずは本研究に携わっている児家センやそのバックアップ施設である児童養護施設の関係者（職員）等をあたってみることで全員が合意した。

(2) 事例検討会の日程変更について（変更後日程は下表のとおり。）

事例検討会 開催日時	検討内容（講義・事例報告者等）
------------	-----------------

3月30日(月) 午後1時30分～	初顔合わせ(自己紹介/本事業のTODO&ミッションの共有)	
4月25日(月) 午後1時30分～	斉藤先生ミニ講義	栃木
5月30日(月) 午後1時30分～	中村先生ミニ講義	横浜
6月27日(月) 午後1時30分～	福井	福岡
7月25日(月) 午後1時30分～	大分	栃木
8月29日(月) 午後1時30分～	横浜	福井
9月26日(月) 午後3時00分～	福岡	大分
10月25日(火) 午後1時30分～	栃木	横浜
11月29日(火) 午後1時30分～	福井	福岡
12月10(土)、11日(日)	JaSPCAN 学術集会 福岡大会(公募シンポジウム)	
1月30日(月) 午後1時30分～	大分	まとめ

(3) 斎藤真緒先生の講義(ヤングケアラー支援入門講座)

内容は別添「講義録」のとおり

(4) 事例検討①

1. ケースの概要

本児の他、祖母、父母、弟の家族構成。従前より父母は、養育を祖母に任せて仕事に出ているが、祖母が亡くなり、本児は不登校の弟の面倒を見るため学校に行けなくなっている。

父母は本児と弟の不登校状態を深刻に捉えておらず、家事もままならないようで、家にはゴミが散乱している状態。

かつて本児らが通園していた保育園の園長とは良好な関係が構築されていた。

2. 支援・活動の状況(アクション)

アウトリーチで食支援(週1回の弁当配達)を展開中。

保育園長や市スクールソーシャルワーカーにインタビューを実施。

3. 課題・成果(イシュー・ポイント)

関係性を持ちにくい家庭であるが、地道な活動をする中でどのような支援の心構え(支援の視点)が必要なのか。支援の見通し(方向性やビジョン)を持ちたいが、きっかけが見えずに苦労している。

食べ物による支援は、直接、胃袋を満たすので満足感も得られやすい。緊急支援として入りやすい一方で、支援者は食べ物を与えることで満足し、もらう側を依存させてしまう。

関係性の貧困を改善するならば、弁当配達だけでなく、子どもや保護者が外の世界に触れる機会(人、サービスといった社会資源)を多く作っていきたい。

4. 全員討議の概要

関係性の良好な保育園長へのインタビューで、家族の実情やうまく付き合うための秘訣等を押さえたのはとても良い支援の入り方で、次のステップとして、この取材で得た情報を他機関と共有していくべき。わけても福祉と教育は分断されがちだが、特に

学校・教育委員会との情報共有は大切。

このケースでは食支援や保育園など個々につながることができている。少なくとも安否確認はできているのだから、決して焦らずこの関係性を継続することが重要。むしろ現にケースと関係性を保っている複数の社会資源同士が繋がり合うための場や仕組みをつくるような努力が必要か。そのためには要対協の機能拡充が不可欠。

食支援は、繋がりを保つための極めて有効な手段になっているので、依存に陥ることをリスクと見なさずに継続すべき。次のステップとしては、子どもが外の世界に触れる機会をつくるべく、地域の子ども食堂などに連れ出せることを目指してはどうか。民生委員さんらがお弁当を持っていく作業の、その先にあること（食べ物の好き嫌い⇒世間話⇒家族の相談）を想像しながら関係性をつくっていけるような方が地域にたくさん増えると良い。

家族丸ごと支援の視点は重要。それはヤングケアラー支援であっても、一般的なケアラー支援であっても共通している。

祖母が要介護状態になる場合には、介護保険制度等で外部とつながる機会があると予想される。介護分野と子育て分野の連携が今後の課題。

ライフステージのターニングポイントで、個人が外と繋がっていくイメージが重要。今後、本人（ヤングケアラー）がどういうふうに生きていきたいか、どんなことを望むかを、誰と一緒に考えていけるかが重要だと思う。

当事者同士をつなぐ場をつくるアプローチもありか。

ケアを要する児童に対し、安心していれる居場所や空間があることがまず重要。学校に日中行けない子をいかに支えるかというのはどの地域でも必要な課題。

それぞれライフステージのターニングポイントで、個人が外と繋がっていく、それが横になって家族全体で面になるみたいなイメージが重要。